

# 学歴の家族・親族間相関に関する基礎的研究

## —祖父母・オジオバ学歴の効果とその変動—

荒牧 草平

(九州大学大学院人間環境学研究院)

### 【要旨】

2008年全国家族調査(NFRJ08)では、調査対象者の父母、配偶者、きょうだい(上から3番目まで)、子ども(上から3番目まで)の学歴が調査されている。「子ども」からみれば、「祖父母」「父母」「オジオバ」「自分のきょうだい」の学歴が分かる。全国レベルでオジオバ学歴まで聴取した例は他になく、大変に貴重なデータと言える。本稿では、この特徴を生かし、学歴の家族・親族間相関に関する2つの基礎的な課題に答えてみたい。1つは、子の学歴と「祖父母」学歴および「オジオバ」学歴との相関関係および、それらの趨勢を明らかにすることであり、もう1つは、父母学歴を統制した場合に、そうした相関関係が残存するか否かを確認することである。

分析の結果、(1)祖父母およびオジオバ学歴は、子どもの学歴と一定の相関を持ち、特にオジ学歴との相関は父母と同程度であること、(2)それらの関連は、時代とともに強まる傾向にあること、(3)父母学歴を統制しても、統計的に有意な相関を持つこと、(4)特にオジ学歴の相関は強いが、高学歴を保持していることによる正の付加効果ばかりでなく、相互作用(累積効果と補充効果)や負の効果も認められることなどが明らかとなった。

いずれの結果も、親族学歴に着目することの有用性を示しており、今後も研究を深めていく意義が示されたと言える。家族構造の影響を重視しキョウダイ学歴を聴取するというNFRJ08の新しい試みは、「理論的焦点の転換」(Merton 1949)をもたらすことが期待される。

キーワード：オジオバ学歴、祖父母学歴、家族構造

## 1. 関心と目的

わが国の教育達成に関する研究は、家族や親族の影響について十分な関心を払ってきたとは言えない。確かに「家族背景 (family background)」として親の職業や学歴、暮らし向きなどに着目する研究は数多くなされてきたものの、「家族構造 (family structure)」の側面については、主として、きょうだい数や出生順位への関心に(近藤 1996; 平沢 2004; 片瀬・平沢 2008 など)とどまっている(近藤 1996)。方法論的個人主義に基づく世代間社会移動の研究では、家族という社会的単位が捨象されており、「家族という社会単位は個人に関するデータを集めるための便宜上の枠組にすぎない」(片岡 1990:58)という状況は、その指摘から20年たった現在でも大きく変わっていない。

例外としては、親-子-孫の3世代にわたる学歴相関を扱った尾嶋(1988)や片岡(1990)

の研究があり、いずれも祖父効果を認めている。ただし、1955年と1985年のSSM調査のデータを使用した片岡（1990）は、1955年調査にくらべ、1985年調査では効果が弱まったことを報告している。そこから、さらに20余年を経た現代において、そうした関連はどう変わったのだろうか。片岡（1990）の確認した効果の弱まりが、その後も続いてきたのだろうか。家族社会学的には、そうした関連の度合いが核家族化の進行とともに、どのように推移してきたか大いに注目される場所である。また、先行研究での検討は、あくまで祖父による孫息子への効果という男性同士の関連に限られていたが、女性の場合はどういった影響があるのかも興味をひかれる場所である。

他方、家族や親族の学歴に着目する意義は、これにとどまるわけではない。1つの重大な関心は、父母の学歴を統制しても、親族学歴の独自効果が残るか否かという点に寄せられる。従来の研究は、子どもの学歴に対する家庭の文化的背景として、親の学歴に着目するのが一般的であった。中には、Bourdieuの文化資本論を背景に、客体化された文化資本（蔵書数）や身体化された文化資本の指標化を試み、実証的に検討しようとする研究もあるが、いずれの場合も生まれ育った家族（主として核家族）の情報を収集するに留まっている。しかしながら、もし親族の独自効果が無視できないほどに存在するなら、教育達成の階層化メカニズムを考察する際にも、これまでのように核家族に着目するだけでは不十分だということになる。

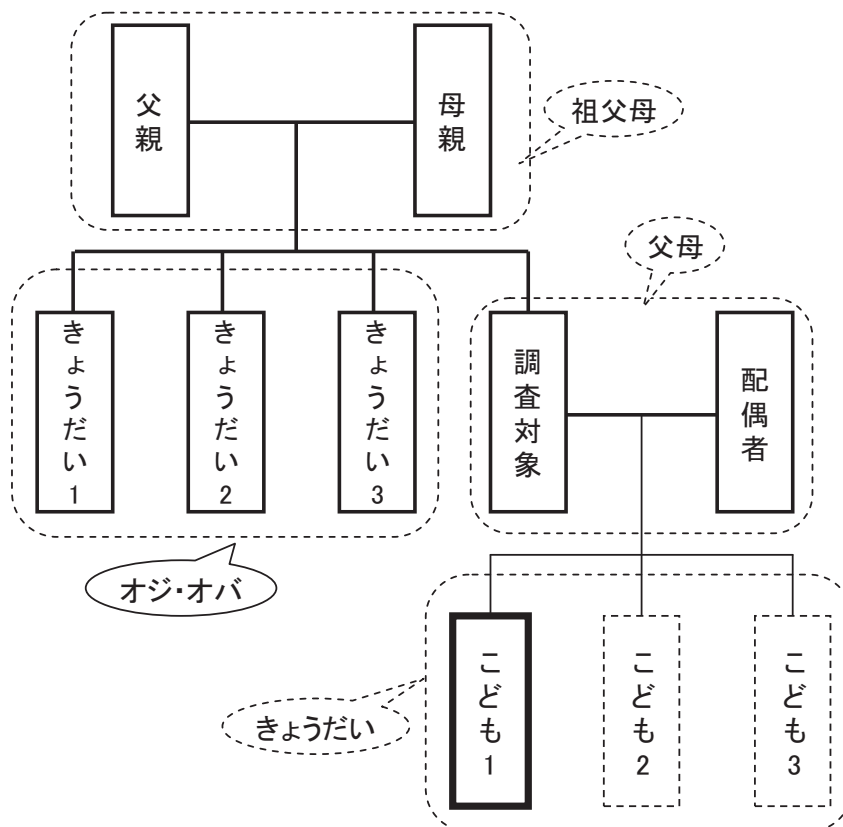


図1 NFRJ08で把握可能な学歴

家族社会学会が実施した 2008 年全国家族調査（NFRJ08）では、図 1 に示した通り、調査対象者の父母、配偶者、きょうだい（上から 3 番目まで）、子ども（上から 3 番目まで）の学歴が調査されている。「子ども」からみれば、「祖父母」「父母」「オジオバ」「自分のきょうだい」の学歴が分かる。全国レベルでオジオバ学歴まで調査した例は他になく、大変に貴重なデータと言える。

本稿では、この特徴を生かし、学歴の家族・親族間相関に関する次の 2 つの基礎的な課題に答えてみたい。1 つは、子の学歴と「祖父母」学歴および「オジオバ」学歴との相関関係および、それらの趨勢を明らかにすることである。ここでは、上記の通り、関連の弱まりという趨勢が確認されるのか、安定性が確認されるのか、そうした関連は社会変動とりわけ高学歴化や核家族化の趨勢とどのように関連するのかが主たる関心となる。もう 1 つは、父母学歴を統制した場合に、そうした相関関係が残存するか否かを確認することである。仮にそうした関連が認められた場合、教育達成の階層化過程について、親族学歴という新たな視点を盛り込む必要性が指摘されることになる。

## 2. データと変数

### 2.1 データ

使用するデータは日本家族社会学会の実施した 2008 年全国家族調査（NFRJ08）である。なお、過去の NFRJ 調査では親族学歴が聴取されていないため、利用できるのは 2008 年データに限られる。調査対象は 2008 年に 28～72 歳（1936～80 年生）の者であり、有効票本数は 5,203 票、回収率 55.4%であった。なお、本稿では、子どもが大学まで進学したか否かを問題にしたいので、分析対象となるのは、子どものいる調査対象のうち第 1 子が 19 歳以上に達している 2,710 票である。

### 2.2 学歴情報に関する設問と利用可能なデータ

上述の通り、調査対象者の「子ども」から見た場合、NFRJ08 のデータでは、祖父母（調査対象者の父母）、オジオバ（調査対象者のきょうだい）、父母（調査対象者と配偶者）、キョウダイ（調査対象者の子ども）の学歴情報が利用できる。とはいえ、必ずしも完全な情報が得られているわけではないので、以下、それぞれの学歴をどのように聴取したのか、実際の調査項目を参照しながら、個別に確認することとしよう。

#### 「子ども」の学歴

「子ども」の学歴は以下の問によって聴取しており、最大で 3 人の「子ども」に関する情報が利用可能な設計となっている。しかし、キョウダイ間の関連や影響を考察する際には、キョウダイのある「子ども」のみを対象とするため、分析可能なケース数が減ってしまう。ところが、キョウダイに関する研究には一定の蓄積がある一方で、祖父母やオジオ

1番上のお子さん	2番目のお子さん	3番目のお子さん
(ア) この方が現在在学中の（学校をすでに終えている場合には、最後に卒業された）学校はどれですか。中退も卒業と同じ扱いでお答えください。（○は各1つだけ）		
<b>0</b> まだ学校に行っていない <b>1</b> 保育所・幼稚園 <b>2</b> 小学校・中学校 <b>3</b> 高校 <b>4</b> 専門学校（高卒後） <b>5</b> 短大・高専 <b>6</b> 大学（4年制） <b>7</b> 大学院・大学（6年制）	<b>0</b> まだ学校に行っていない <b>1</b> 保育所・幼稚園 <b>2</b> 小学校・中学校 <b>3</b> 高校 <b>4</b> 専門学校（高卒後） <b>5</b> 短大・高専 <b>6</b> 大学（4年制） <b>7</b> 大学院・大学（6年制）	<b>0</b> まだ学校に行っていない <b>1</b> 保育所・幼稚園 <b>2</b> 小学校・中学校 <b>3</b> 高校 <b>4</b> 専門学校（高卒後） <b>5</b> 短大・高専 <b>6</b> 大学（4年制） <b>7</b> 大学院・大学（6年制）

バの効果に関する研究はほとんどないのが現状である。これらのことを勘案し、本稿では、まず第1子学歴に対する、祖父母学歴とオジオバ学歴の効果に着目することとしたい。

なお、本稿では高校卒業後さらに進学したか否かを問題としたいので、19歳以上の「子ども」のみを分析対象とする。したがって、夜間部などを除くと、高校以下の学校に在学中の「子ども」は基本的にいない。そこで、「4 専門学校（高卒後）」以降の選択肢を回答した者についても、それらを最終学歴とみなすと、この問への回答から「子ども」の最終学歴に関する変数が作成できる。ここでは、家族・親族との比較可能性も考慮し、「中学」「高校」「短大・高専（専門学校を含む）」「大学・大学院」の4分類をベースに分析を進めることとする。

### 「祖父母」の学歴

「祖父母」の学歴は以下の質問による。なお、設問文には「あなたのご両親のことについてうかがいます。（実父母のほか、養父母や継父母をおもちの方は、あなたが子どもとしてもっとも長くかかわった人を親と考えてください。）」との注意書きがある。次に見るオジオバの場合とは異なり、「健在の」という制限を設けていないので、基本的にはすべての

お父さん	お母さん
(イ) この方が最後に行った（または在学中の）学校は次のどれにあたりますか。中退・在学中も卒業と同じ扱いでお答えください。（○は各1つだけ）	
<b>1</b> 中学校（戦前の小学校〔尋常科・高等科〕・国民小学校・青年学校） <b>2</b> 高校（戦前の中学校・実業学校・師範学校） <b>3</b> 専門学校（高卒後） <b>4</b> 短大・高専（戦前の高校・専門学校・高等師範学校） <b>5</b> 大学（4年制）（戦前の大学〔4年制〕） <b>6</b> 大学院・大学（6年制） <b>7</b> その他（具体的に） <b>8</b> わからない	<b>1</b> 中学校（戦前の小学校〔尋常科・高等科〕・国民小学校・青年学校） <b>2</b> 高校（戦前の高等女学校・実業学校・師範学校） <b>3</b> 専門学校（高卒後） <b>4</b> 短大・高専（戦前の高校・専門学校・高等師範学校） <b>5</b> 大学（4年制）（戦前の大学〔4年制〕） <b>6</b> 大学院・大学（6年制） <b>7</b> その他（具体的に） <b>8</b> わからない

該当者に関する情報が得られる設計となっている。ただし、聴取できるのは、調査対象者の父母だけなので、子どもからすると、父方か母方いずれか一方の情報しか得られない。

なお、「祖父母」の場合には、当然、旧制学歴の者が多数含まれるが、NFRJ では、調査票に記載されている通り、選択肢において新制学歴と旧制学歴の対応がとられている。したがって、「祖父母」学歴についても、これをリコードした、「中学」「高校」「短大・高専（専門学校を含む）」「大学・大学院」の4分類を用いるが、それぞれに対応した旧制学歴の保有者も含まれていることに留意されたい。

### 「オジオバ」の学歴

「オジオバ（調査対象者のキョウダイ）」の学歴は以下の質問によるが、設問文には次のような注意書きがある。

ご健在のごきょうだい一人ひとりについて年上の方から順に、下表の（ア）～（ス）について、あてはまるものに○をつけるか、数字を記入してください。ご健在のごきょうだいが4人以上いる場合には上の3人についてお答えください。

1番年上のきょうだい	2番目のきょうだい	3番目のきょうだい
(エ) この方が最後に行かれた（または在学中の）学校はどれですか。 中退も卒業と同じ扱いでお答えください。（○は各1つだけ）		
1 未就学	1 未就学	1 未就学
2 中学校	2 中学校	2 中学校
3 高校	3 高校	3 高校
4 専門学校（高卒後）	4 専門学校（高卒後）	4 専門学校（高卒後）
5 短大・高専	5 短大・高専	5 短大・高専
6 大学（4年制）	6 大学（4年制）	6 大学（4年制）
7 大学院・大学（6年制）	7 大学院・大学（6年制）	7 大学院・大学（6年制）

ここでの1つの問題は、「健在の」者に限定している点にある。また、年長の世代では、4人以上のキョウダイを持つ場合も多いが、上から3人目までに限定しているため、調査対象者が多キョウダイの場合、年長のキョウダイの情報に偏ってしまう設計となっている。また、祖父母の場合と同様、父方と母方のいずれか一方についてしか情報を得られていない。

なお、オジオバが「子ども」より年齢が低いことも有り得ないわけではないが、そうした例は希であり、本稿の有効ケースには含まれていなかった。したがって、ここでは、この問への回答をオジオバの最終学歴とみなし、「中学」「高校」「短大・高専（専門学校を含む）」「大学・大学院」の4分類を用いて分析していくこととする。

### 2.3 オジオバ学歴のとらえ方

オジオバ（調査対象者のキョウダイ）に関する情報は、先に示したような形式で得られ

ているが、人数（0～3 人）も性別構成も様々であるため、順位も考慮した場合の組合せは図 2 に示したように 15 通りにもなる。したがって、オジオバ学歴について集計する前に、まず、オジオバの構成について確認してみよう。

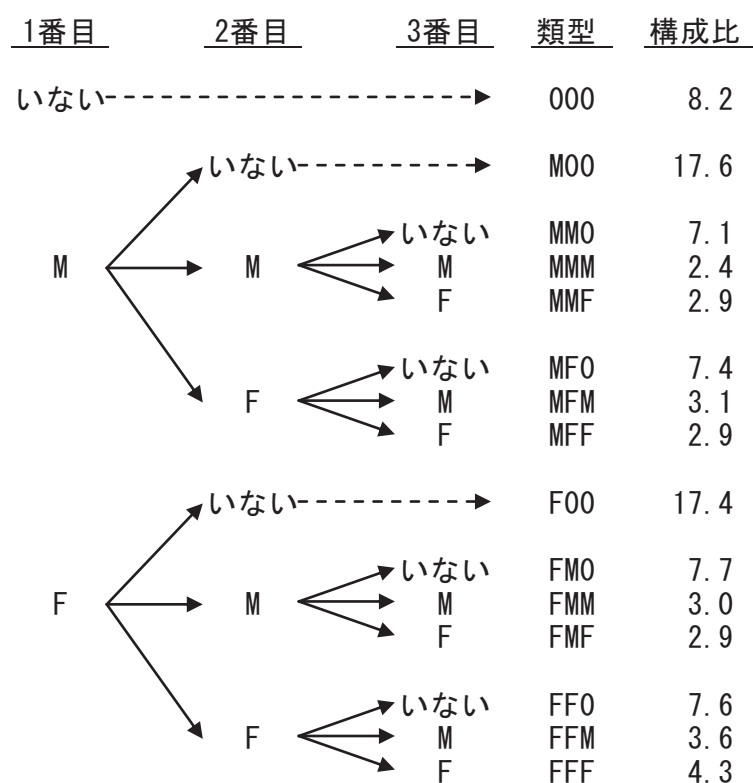


図2 オジオバの組合せと構成比

注) Mはオジ。Fはオバ。

「類型」の「0」はオジオバが「いない」ことを表す。

調査対象者のキョウダイ学歴に対する回答状況（「非該当」コードと性別情報）から、オジオバの組合せ別構成比を算出した結果を図 2 に記した。ここから、オジオバのいない者が 8%、1 人が 35%、2 人が 30%、3 人以上が 25%であることがわかる。オジオバが 2 人の場合、ありうる 4 つの組合せの分布はほぼ均等だが、3 人の場合は 8 つの組合せの分布に偏りがあり、オジばかり 3 人（MMM）のケースが少なく（2.4%）、オーバーオーバーオジ（FFM）の組合せ（3.6%）、およびオバ 3 人（FFF）のケース（4.3%）が多い。かつてはイエの存続のため男子を望む傾向が強かった（あるいはその名残）から、女子が続くとキョウダイ数が増えやすい等とも考えられるが、先の質問文にあるようにキョウダイについては「ご健在の」とたずねているので、女性の平均寿命が長いことを反映している可能性がある。

このように多様なオジオバ構成（15 類型）をベースに、学歴構成とその影響を検討していく際に、ここで得られたすべての情報を用いて分析するのは現実的とは言えない。では、



どの情報を生かして変数化すべきだろうか。この判断は、もちろん、オジオバ学歴の効果について、いかなる因果メカニズムを想定するかに依存する。

まず、性別によって学歴分布が大きく異なることは自明なので、オジとオバの区別は外せない。難しいのは、オジやオバの人数が異なる場合の扱いである。1つには、人数に応じて、オジまたはオバが1人の場合、2人の場合、3人の場合、というように、データを分割して集計する方法がありうる。しかし、この場合には、人数が異なる家庭を同じ土俵で扱うことができないし、オジまたはオバがいないケースを分析から除外してしまうことになる。オジまたはオバがいる家庭の間だけでなく、いない場合との比較も重要であると考えれば、この方法は望ましくない。また、データを分割してしまうと、分析上の自由度や安定性が失われてしまうという別の問題もある。

したがって、ここでは、オジオバを含む親世代の定位家族の情報を、何らかの代表値からとらえる工夫をしてみよう。オジまたはオバの人数が異なるケースを同列に扱うには、それらの学歴について、平均値、最大値、最小値のいずれかを採用することが考えられるが、学歴はカテゴリカルな変数であり、基礎的な集計を行うのが本稿の役割でもあるから、ここでは最大値を採用することとしよう。

最も高い者の情報のみを採用するということは、子どもの学歴に対するオジオバ学歴の効果は、オジやオバの出生順位や数によって異ならないと暗に仮定していることになる。また、場合によっては2人分の情報を捨てることになる（極端な例を考えれば、3人とも高等教育を受けている場合と、1人が高等教育を受け残りの2人が義務教育しか受けていないケースを同等に扱うことになる）。にも拘わらず、こうした方法を採用する根拠は、オジオバの人数によらず、親の育った家庭の重みを同等に扱い得る点にある（オジやオバがいない場合も「いない」としてコード化する。これにより、欠損ケースを少なくすることもできる）。別の見方をすれば、この場合には、1人でも高等教育を受けた家庭と1人もいなかった家庭を区別する一方で、前者と複数の者が高等教育を受けている家庭を区別しないということになる。ここで、オジオバ世代では、高等教育を受けている者が相対的に少数であるから、全体の傾向をとらえるには、1人でも高等教育を受けた者がいるか否かを区別できる方が重要であると言えるだろう。また、オジとオバ、つまり男女を区別しているのだから、実際には失われる情報はそれほど多くない<sup>1</sup>。

なお、便宜的に、この方法を正当化する理論的根拠としては、たとえば「親が育った家庭の持つ教育達成に対する効果は、そのうち特に成功した子ども（オジまたはオバ）に相続されている」という考えがあり得る。本稿は、必ずしも、こうした仮説の妥当性を検討する目的を持って、この方法を採用するわけではないが、キョウダイ間で必ずしも平等に教育投資がなされているわけではないという、キョウダイの学歴達成に関する研究の知見からしても、このような考え方に一定の妥当性が期待されるとも言えるだろう（もちろん、

---

1 図2より、同性が複数含まれる組合せは、オジが18.6%、オバが21.3%であり、このうちの一部の情報が反映されないことになる。

相対的に成功したオジまたはオバに教育達成に関わる各家庭の効果が反映されていること自体は間違いないと言えよう)。

以上の考察に基づき、本稿では、オジ学歴とオバ学歴を別々に変数化し、同性が複数いる場合には、最も高い者の学歴を採用するという方法を採用することとしよう。

### 3. 学歴の家族・親族間相関

#### 3.1 学歴分布

前節の手続きに則って、それぞれの学歴構成について集計した結果を表 1 と図 3 に示した。表 1 で、オジとオバに「非該当・不明」が多いのは、オジやオバが「いない」ケースが多いからである。祖父母の場合は、調査対象者が親の学歴を「わからない」と回答しているケースを「非該当・不明」とした。なお、SSM データ等と比較すると、学歴を「無回答」の者が非常に少ない。面接調査法で実施されている SSM 調査等とは異なり、NFRJ では留置法を用いているため、これらの質問への回答拒否による無回答が少ないのかもしれない<sup>2</sup>。

表 1 子どもと家族・親族の学歴構成 (19 歳以上の子どもがいる場合 N=2,710)

	中学	高校	短大	大学	無回答	非該当・不明
子ども	2.1	31.0	27.9	37.8	1.3	0.0
父親	18.0	40.0	7.0	24.1	1.3	9.6
オジ	12.1	29.7	5.1	17.1	3.1	33.0
母親	18.8	50.0	20.4	6.0	1.6	3.2
オバ	16.2	34.4	12.2	4.7	3.1	29.4
祖父	53.2	16.7	3.5	5.7	5.1	16.0
祖母	54.0	22.1	3.2	0.8	5.2	14.8

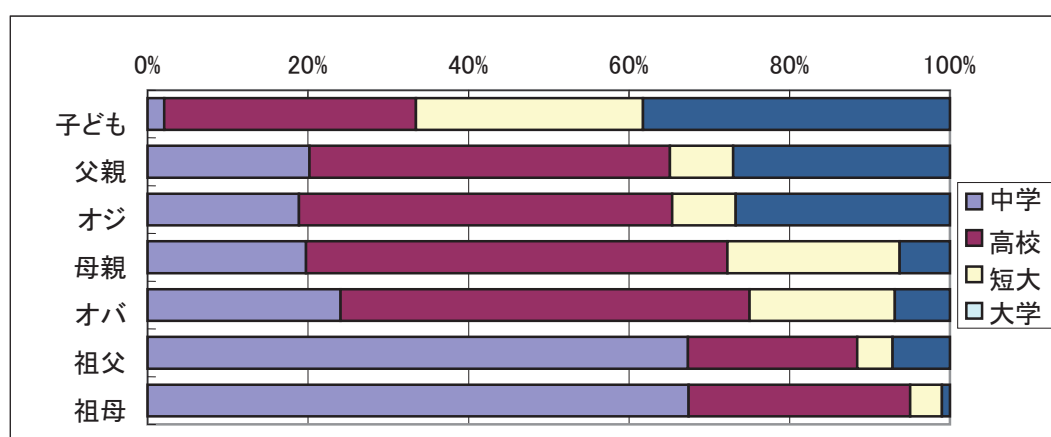


図 3 子どもと家族・親族の学歴構成 (表 1 から「無回答」「非該当・不明」を除外)

<sup>2</sup> 表形式で沢山の項目に紛れて質問したことにより、学歴を回答する事への抵抗感が弱められた可能性もある。



図3は、表1から「無回答」「非該当・不明」を除外して、それぞれの学歴構成を再計算した結果である。これより、祖父母は大半が「中学（旧制小学校等を含む）」しか受けていないが、父母とオジオバでは、「高校」が約半数となっており、子どもは「大学」が最も多いことがわかる。また、父親とオジ、母親とオバの分布は似通っているが、オバは母親より「中学」が若干多く、その分「短大」が少ない。

### 3.2 学歴相関

次に、子どもの学歴と家族や親族の学歴との相関関係について検討しよう。表2は、家族や親族の学歴別に、子どもの学歴分布をクロス集計した結果である。まず、どの家族・親族の学歴も、子どもの学歴と一定の統計的に有意な正の相関を持つことが確認できる。順序づけ可能なカテゴリカル変数の連関の測度であるガンマ係数 ( $\gamma$ ) から見る限り、オジ学歴は父母学歴と同程度の関連を示している。祖父母やオバ学歴との相関は、それらよりは弱いものの、やはり無視できない関連を持っているとすることができるだろう。では、こうした関連は、どのように変化してきたのか、コーホート分析によって明らかにしていこう。

表2 子どもの学歴と家族・親族学歴との相関

		中学	高校	短大	大学	N	$\gamma$
父	中学	2.9	54.2	24.2	18.8	384	0.49
	高校	1.4	29.9	33.3	35.4	949	
	短大	1.8	20.0	35.8	42.4	165	
	大学	0.8	9.4	23.2	66.6	604	
母	中学	4.5	53.9	25.3	16.3	356	0.51
	高校	1.1	29.2	31.1	38.7	1,110	
	短大	0.8	11.7	31.4	56.1	487	
	大学	0.0	6.0	13.4	80.5	149	
オジ	中学	3.1	44.8	30.7	21.5	163	0.45
	高校	1.4	33.0	29.9	35.8	519	
	短大	0.0	18.2	34.3	47.5	99	
	大学	0.3	10.4	24.6	64.8	366	
オバ	中学	1.3	41.1	33.8	23.8	231	0.38
	高校	1.8	27.0	31.4	39.8	625	
	短大	0.4	15.4	28.1	56.1	253	
	大学	0.0	10.1	18.4	71.6	109	
祖父	中学	1.5	29.8	31.3	37.5	1,176	0.37
	高校	1.3	19.6	26.3	52.7	372	
	短大	0.0	10.7	25.0	64.3	84	
	大学	0.0	8.3	16.5	75.2	133	
祖母	中学	1.5	30.0	31.1	37.5	1,175	0.35
	高校	1.2	17.9	26.0	55.0	515	
	短大	0.0	10.8	18.9	70.3	74	
	大学	0.0	5.3	5.3	89.5	19	

注)すべての関連が5%水準で有意。

## 4. 時代による変化の検討

### 4.1 子どもの学歴の推移

学歴関連の推移を検討する前に、「子ども」の学歴分布の推移を社会の高学歴化と対応させながら確認しておこう。

先述の通り、本稿では「子ども」が19歳以上のケースに限定しているが、最年長の「子ども」は57歳（1951年生まれ）となる。分析対象のうち、これら最年長のグループが大学進学を迎えた時期（1970年代）は、ちょうど高度成長期における急激な高学歴化がほぼ終わりを告げた時期にあたっている。大学進学率の停滞（抑制）は、その後、30代半ば（1970年代の半ば生まれ）の世代が進学を迎える時期（1990年代前半）に至るまで続く。それ以降の、19歳（1989年生まれ）～30代半ばまでの若い世代は、18歳人口が減少し進学率が再び拡大しはじめた時期（1990年代半ば以降）に大学進学を迎えている。

表3は、こうした動きがNFRJのデータでも認められるか確かめるため、出生コーホートを10年毎に区切って、「子ども」の大学・短大進学率および高等教育進学率（専門学校を含む）を調べたものである。抑制期に当たる前半の2つのコーホートでは進学率に大きな違いがない一方、大学進学率の再拡大期に該当する後半の2つのコーホートでは値が高くなっている。学校基本調査等と比べると値が若干高めではあるが、基本的には日本社会全体の進学率変動に対応した動きを示している。

表3 子どもの出生コーホート別進学率

	1951-60 年生まれ (48-57歳)	1961-70 年生まれ (38-47歳)	1971-80 年生まれ (28-37歳)	1981-89 年生まれ (19-27歳)
高等教育進学率	52.2	56.2	68.1	74.6
大学・短大進学率	41.3	44.4	52.9	57.5
N	46	728	1087	814

### 4.2 学歴関連の推移

次に、父母、祖父母、オジオバ、それぞれと「子ども」の学歴関連について、コーホート別の推移を確認してみよう。図4はガンマ係数の値を、コーホート別に算出した結果を折れ線グラフで表したものである。なお、すぐ上の表3からも分かるとおり、1951-60年生まれのコーホートはケース数が少ないため、ガンマ係数の算出にあたっては、次の1961-70年生まれのコーホートと足し合わせている。

ここから、父母学歴は、一旦弱まった後に再び強まるという傾向を示すのに対し、その他の親族の場合には、しだいに関連が強まる傾向にあることが読み取れる。ちなみに、すべての組合せにおいて、関連は統計的に有意（1%または5%水準）である。結果は省略するが、こうした推移は、別の関連の測度であるタウbを求めた場合にも認められている。

なお、コーホートをもとの4区分に戻してみると、第1コーホートはケース数が少ないため安定しない面もあるが、概ね、上記と同様の傾向が確認できる<sup>3</sup>。

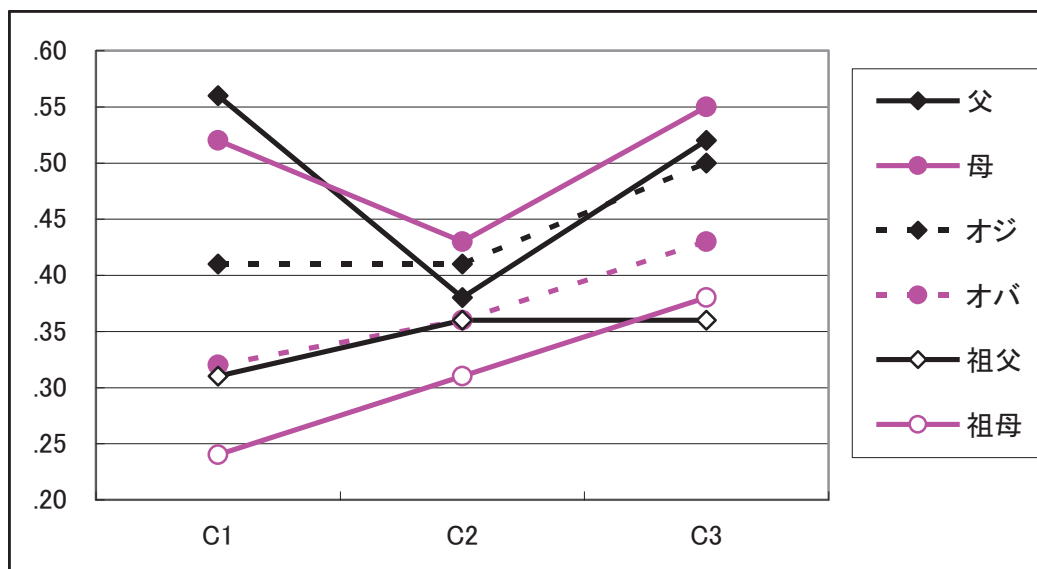


図4 「子ども」と家族・親族間の学歴相関 ( $\gamma$ 係数) の推移

注) C1: 1951~70年生まれ。 C2: 1971~80年生まれ。 C3: 1981~89年生まれ。

ここでとりわけ強調すべきなのは、祖父母とオジオバの場合に、「子ども」の学歴との相関関係が時代とともに強まる傾向が認められた点である。多変量解析など詳しい分析を行わなければ、わからない面もあるが、先行研究で指摘されたのとは逆の傾向が認められたことは、大変に興味深いものと言えるだろう。

しかしながら、親族学歴との相関関係があり、それがしだいに強まる傾向にあるという結果も、それぞれの独自効果を検討してみなければ、あまり意味がない。次に、この点を確認することとしよう。

## 5. 親族学歴の独自効果の検討

### 5.1 祖父母学歴の場合

「子ども」の学歴に対する祖父母学歴やオジオバ学歴の独自効果を検討するには、父母学歴をコントロールした場合の関連を検討することが求められる。表4は、父母それぞれの学歴別かつ祖父母の学歴別に、子どもの高等教育到達率を示したものである。なお、ケース数および結果の煩雑さを避ける観点から、いずれの学歴についても2値に変換してあ

<sup>3</sup> 上記の傾向と異なるのは、オジと祖母の第1コーホートが極端に高い値を示す点だけであるが、これはケース数が少ないことに起因するものと思われる。これをのぞくと、父母がV字の推移を示し、その他が漸増するという先と同様の傾向が認められる。

る。その際、「子ども」と父母は高等教育を受けているか否かの2値としたが、表1や図3にも示した通り、祖父母の場合は大半が義務教育しか受けていないので、「義務」「中高等」の2値に区分している。

表4 父母学歴別・祖父母学歴別にみた「子ども」の高等教育到達率

		祖父			祖母		
		義務 (A)	中高等 (B)	差 (B-A)	義務 (A)	中高等 (B)	差 (B-A)
父親	初中等	63.2	68.2	5.0	62.3	67.8	5.5
	高等	82.2	92.4	10.2	83.8	91.3	7.5
母親	初中等	64.0	72.2	8.2	63.7	70.5	6.8
	高等	84.7	93.8	9.1	85.2	93.4	8.2

ここから、まず全体の傾向として、父母いずれの学歴をコントロールした場合にも、祖父母の学歴が高いほど「子ども」の学歴が高いという関連が認められる。その値自体は、「差(B-A)」という欄に示された通り、それほど大きなものではないものの、すべてが1%水準で統計的に有意である。また、祖父学歴の効果に着目すると、父親が初中等学歴の場合よりも高等学歴の場合に値が大きくなっている。つまり、相対的に祖父学歴が高い場合に示される正の効果は、父学歴の面で有利な条件の場合に、累積的に強まるという相互作用が認められることになる。

## 5.2 オジオバ学歴の場合

次に、オジオバ学歴についても同様に検討しよう。なお、先の表1に示したように、オジやオバが「いない」ケースもそれぞれ3割程度存在したので、表5にはそれらの場合についても同時に示した。これを比較の基準とすると、相対的に高学歴を保持していることによる正の効果ばかりでなく、負の効果についても検討することが可能となる。

表5 父母学歴別・オジオバ学歴別にみた「子ども」の高等教育到達率(%)

		オジ				オバ			
		初中等 (A)	高等 (B)	差 (B-A)	いない	初中等 (A)	高等 (B)	差 (B-A)	いない
父親	初中等	56.5	77.3	20.8	62.1	60.2	74.7	14.5	58.0
	高等	73.9	92.5	18.6	89.0	81.3	92.5	11.2	88.1
母親	初中等	55.7	81.1	25.4	63.9	61.1	78.5	17.4	59.5
	高等	80.6	92.8	12.2	90.0	82.2	91.8	9.6	92.5

まず全体を通して明らかなのは、祖父母の場合と同様に、いずれの組合せにおいても、オジオバの学歴が高いほど「子ども」の学歴も高いという傾向が認められる点である。ま

た、「差(B-A)」の欄からもわかるように、どちらも祖父母の場合より大きな効果を持つが、特にオジ学歴による効果が大きいことが指摘できる。また、祖父の場合は、正の累積的効果が認められたが、オジオバ学歴の場合には、むしろ父母の学歴が相対的に低い場合に、それを補う効果が大きい傾向にある。特に、母親が高等教育を受けていない時、オジやオバが高等教育を受けているか否かは、子どもの高等教育到達率と強い関連を示す。

表6 オジオバ学歴の正効果と負効果

		オジ		オバ	
		初中等	高等	初中等	高等
父親	初中等	-5.6	15.2	2.2	16.7
	高等	-15.1	3.5	-6.8	4.4
母親	初中等	-8.2	17.2	1.6	19.0
	高等	-9.4	2.8	-10.3	-0.7

注)表5より作成。値は%ポイント。

さらに興味深いのは、オジオバが「いない」場合との比較である。表6は、オジやオバが「いない」場合における「子ども」の高等教育到達率と、オジやオバがいる「子ども」のそれが、オジやオバの学歴によってどの程度異なるかを、表5から算出した結果である。ここから、先に指摘したように、父母が低学歴の時にオジオバが高等教育を受けていることの補充効果は確かに認められるものの、低学歴のオジやオバがいることによる負の効果も存在することがわかる。特に、父親が高等教育を受けている場合でも、オジが高等教育を受けていないと、「子ども」の高等教育到達率は、かなり低く(-15ポイント)なっていることが認められる。母親とオジ(-9ポイント)、母親とオバ(-10ポイント)の場合にも、これに準じる負の効果が認められる。

## 6. 考察と今後の課題

本稿は、「子ども」にとっての、祖父母、父母、オジオバの学歴を聴取した2008年全国家族調査(NFRJ08)の特徴を生かし、学歴の家族・親族間相関に関する2つの基礎的な課題の解明を試みた。

分析の結果、第1の課題である学歴相関の実態とその変容については、(1)祖父母およびオジオバ学歴は、子どもの学歴と統計的に有意な一定の相関を持ち、特にオジ学歴との相関は父母と同程度であること、(2)父母と子どもの学歴相関は一度弱まった後に再び強まるV字型の推移を示す一方で、祖父母やオジオバ学歴との相関は、時代とともに強まる傾向にあること、などが明らかとなった。また、第2の課題である親族学歴の独自効果については、(3)父母学歴を統制しても、祖父母やオジオバ学歴は子どもの学歴と統計的に有意な相関を持つこと、(4)祖父学歴が相対的に高い場合の効果は父学歴が高い場合によ

り強いこと（累積効果）、(5) 祖父母よりもオジオバの効果がより強く、特にオジの効果が強いこと、(6) オジオバの効果は父母の学歴が低い場合により強いこと（補充効果）、(7) オジオバが「いない」場合と比較して相対的に低学歴のオジオバがいることの負の効果が認められること、などが明らかとなった。いずれの結果も、親族学歴に着目することの有用性を示しており、今後も研究を深めていく意義が示されたと言える。

しかしながら、本稿には多くの課題が残されている。まず、基礎的な分析として、子どもの性別や、親族が父方であるか母方であるか、および同居しているか否かの違いや、年齢の効果などが検討できていないが、これらはいずれも家族社会学的に重要な観点であり、今後まず取り組むべき課題といえることができる。また、分析の技術的な問題として、オジオバ学歴を変数化する方法、第2子以降をどう扱うかなどが残されている。さらに、NFRJデータには、付き合いの種類や頻度など、家族構造の質的変数も含まれているので、これらとの関連についても、いずれは分析することが望まれる。

もちろん、これらの課題にどう対応していくかは、研究関心や理論・仮説と関わる。たとえば本稿では、オジオバ学歴を変数化する手順を選択する際に、＜親が育った家庭の持つ教育達成に対する効果は、そのうち特に成功した子ども（オジまたはオバ）に相続されている＞という考え方を便宜的に理論的な根拠とした。その妥当性をここで判断することはできないが、上記の分析結果はこうした考え方と整合的である。しかしながら、これとはまったく別の考え方、たとえば子どもの教育達成に対する親族学歴の効果は、子どもの身近（身内）にある学歴資格の総量（たとえば大学に行った親戚が何人いるか）が重要である<sup>4</sup>なども検討してみる価値があるように思える。

いずれにしても、教育達成の階層化メカニズムに関する考察は、Bourdieuの文化資本論や安田の指摘した家族の「物質的・精神的遺産」（安田 1971:143-147）といった概念を参考にしつつ、親族学歴の作用という新たな視点を盛り込みながら、理論化を進めていくことが求められるだろう。このような研究の展開を促すという事実が示すように、NFRJ08で導入された「きょうだい」学歴の聴取という新しい試みは、Mertonの言う「理論的焦点の転換」（Merton 1949=1961: 103-105）をもたらすものと期待できるだろう。

## 〔文献〕

- 平沢和司, 2004, 「家族と教育達成：きょうだい数と出生順位を中心に」渡邊秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容』東京大学出版会, 327-346.
- 片岡栄美, 1990, 「三世代間学歴移動の構造と変容」菊池城司編『現代日本の階層構造—教育と社会移動』東京大学出版会, 57-83.
- 片瀬一男・平沢和司, 2008, 「少子化と教育投資・教育達成」『教育社会学研究』82: 43-59.

---

4 ただし、この場合には、世代や性別による一般的な学歴構成の違い（同じ学歴でも時代や性別によって価値が異なる事）を考慮できない（あるいは考慮するとなると非常に複雑）という問題がある。



近藤博之, 1996, 「地位達成と家族：キョウダイの教育達成を中心に」『家族社会学研究』8: 19-31.

Merton, Robert K., 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎共訳『社会理論と社会構造』みすず書房).

尾嶋史章, 1988, 「世代間社会移動の分析」直井優・尾嶋史章編『農村社会の構造と変動：岡山市近郊農村の30年』大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法講座: 14-32.

安田三郎, 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会.

## **Correlations Between Family Members' Academic Qualifications: The Effects of Grandparents', Uncle's, and Aunt's on Child's One**

**Sohei ARAMAKI**

**Kyushu University**

NFRJ08 (National Family Research of Japan 2008) collects the information on academic certifications of respondents, and their families: spouses, parents, children's, and brothers' and sisters'. It means that we can investigate the correlations between children's academic qualifications and their families' one: parents', grandparents', uncles', aunts', brothers' and sisters'. In this paper, we focus on the two basic characteristics of family relationships on academic qualifications. First, the strength of family correlations and their trends are examined. Second, we clarify the direct effects of grandparents' and uncles' and aunts' qualifications on children's one.

The main results show that the correlations of children's qualifications and their grandparents', uncles', and aunts' one are increasing; grandparents', uncles', and aunts' qualifications have the direct effects on children's one net of their parents' qualifications; the direct effects of uncles' and aunts' are both positive and negative. All these findings claim the necessity of more analyses on the relation between academic qualifications within relatives.

**Key words and phrases:** family structure, academic qualifications of uncles' and aunts', family relationship